

帳の頃、マキはただいまと道場脇母屋の重い木戸を開けた。久し振りに早帰りしたか父っ様がお帰り、奥から爺っ様も出て来た。マキは爺っ様に黄八丈のベストを父っ様へはネクタイ、一太郎が目を細め楽しかったようじゃったな、裕太郎は何か魂胆でもと言いたげな表情でそっと胸にあてがえた。

いっづくではまりが満面の笑みで包みを解いた、早速黄八丈の前掛けを締めカウンター前でモデルさん仕草、お馴染みさんから掛け声と拍手が起こる。

九月に入り学校は二学期に入った、マキも幼稚園が始まりいっづくに来る機会が少なくなった。そんな花金の午後いっづくに来た。

「吉祥寺で今夜のりとさちさんに会います、それにりえちゃんも来られる様な事言ってた、いなか使っていいでしょう、お土産も渡したいし一平焼酎あるんでしょ」

「そのメンバーじゃー小生は影のようなんだ遠慮するでしょう、この焼酎皆に渡して」

「残念がる人もいるかもよ、それから一平お願い事があるんですが」

「改まってなんだい」

「板さんに今夜行くからと何時もの小上がりをキープしといて、それから魔王頂きます」

一平は想定内だったかウツとするも肯定の如く肯く。

午後七時いなかマキとりえが、少し経って海老原幸子が来た。

揃ったねとマキ、先ずは生でカンパイしましょ、女将さんお願い。

「今日は一平さんは来られないの、国王の八丈島日程が決まったの」

とさっちゃんはA4紙をテーブルに広げた。

「そのメンバーじゃー小生は影のようなんだ遠慮しとくよ言っていた、でも電話してみるね」

一平はいっづくで馴染の刑事さん達と八丈島談義している、ルパンが喚く、ガラケイON。

「さちさんが国王一行の八丈島の日程持って来てくれたよ、話したい事もあるんだって来て」

マキ達はジョッキを空け魔王のロックを始めていた。ラッシャイと板さん、やあーと一平が右手を挙げ入って来る、女将がロックそれともジョッキする、一平はマキ等のテーブルを見て言う。

「取り敢えずジョッキをそれと魚介類を人数分」

のりとさつちゃんとりえに軽く会釈し尻に座布団をかい胡坐をかいた。一平さん35度の島焼酎有難うございます、大事にしますと各々が言った。

「さちさんがピース国のお酒持って来てくれましたお礼してね」

とマキ。

「あいやー有難うございます、これこそ大事に致します」

そーこーしてたら女将がジョッキ持って来た。

改めてカンパイしましょうよとさつちゃんが、ロックグラスとジョッキが高々と上がった。

「で、まわらん内に話しておきます、八丈の日程を」

「おおー、そうだったなお願いします」

「ここにも記してあります、眠しながら聞いて下さい。朝羽田を発ち午前中はナズマドで二本し昼は檜石のいそぎえんでご赦免料理を食べます、午後八重根で潜水時間にも依りますが2ないし3本の予定、宿泊は大吉丸です」

「あつ、そこ知ってる居酒屋もやっていてペンションと民宿があるところね」

マキが一平を見ながら言った。

「そーそこです、滞在中は店もペンションも貸し切りです、夕食は島焼酎と島寿司中心になります、朝は国王夫妻が一時間程度散策し朝食はパン中心の予定」

「八時半より島内観光、ふれあい牧場でアイスクリームを食する、王女は大のアイス好きと聞いています。飛行機の

離陸を見て南原千疊敷に行き宇喜多ご夫妻とお会いする、昼は名代一休庵で摂る。登龍峠展望台で八丈富士や市街地を、末吉で地質を勉強しみはらしの湯に入り太平洋を見渡しながら露天風呂に浸かります。地熱発電所の原理を勉強し周遊道理に出てアシタバアイスを食べ、天然プールや裏見の滝を回って中里のふるさと村へ、ここでは時間の許す限り歴史や六法積みを勉強したり昔を偲び散策を楽しむ。日が降りる頃を見計らって大坂トンネルの展望台に、豪快に沈む夕陽を堪能し大吉丸に。最終日は朝散のみで九時の飛行機で羽田に戻ります」

一人で喋ってしまったとグラスを一口しさっちゃんが言った」

マキは一平が予定表に暗号らしき数字やらアルファベットを書き入れたのを何の為と聞いた。

「小生等の回った所と重ねただけだよ」

だがそう言う一平の顔が普段と相違しているのをマキは見逃さなかった。

「宿泊所は無論、食事処や立ち寄る名所旧跡を始め温泉も滞在中は立ち入り禁止する予定です、漁業組合へは潜り地点での操業はお休みして頂き八丈署に交通規制も願う予定にしています。等々、来週は実踏を兼ね挨拶回りにランソン駐日大使も実踏班に加わります。」

でも一平さん、大河原健三君が益々首を突っ込んでしまったと言うか変なのよ、本国での最終打ち合わせの時、シヤルム二等書記官、白家補佐官と反国王派のラルフ中島議員が再三合ってひそひそ話、満を期して大河原君は三人に正した、国王来日の打ち合わせをしているんだ、聞こえんよう話したって物事が進みません、それとも聞かれては困る事を話しているのですか、私が止めるのも効かずに三人に言ったんです」

「その後は其々どーなったか三人否四人は」

「白家補佐官は真っ赤な顔して君は与えられた仕事をしていればいいんだと怒鳴り散らした、諦めきれない大河原君を宥め別室に連れ出しました。大河原君曰く、どこで仕入れたかは不明ですがあの三人、準備は他に任せて良からぬ相談事をしている様だと真顔で言うんです」

「帰国してから彼の様子は」

「なお一層深刻な表情になってしまった」

「彼にリスクはあるしもなけれど、補佐官や大河原君から眼を離さんで欲しい」

「あつ、いけないこの席には合わない話ばかりしてしまったゴメン魔王お代わりしようかな」

小生もつい聞き入ってしまった、ここはこれでマキにカードを渡しごゆっくりと言いい席を立った。

「一平、だから好きよ皆のロック作ったら無くなっちゃう、女将さん魔王もう一本出して」

モーと言った表情の一平を板さんと女将さんは仲のいい年の差カップルだと笑いを堪えている。

数日後一平の予感的中した。朝食後アイスセンブリ茶を飲んでいた、ルパン三世の喚き方がいつもと違う、さつちやんからだ、一平ですと出た、わつ私さつ幸子でです、たったいへん……、普段落ち着きあるキャリアウーマンのさつちやんだが自分を忘れたか慌て涙交じりの話し方。

「いいかさつちやん、落ち着くんだ、深呼吸をして普段の自分に戻るんだ、それから話すんだ」

コーヒーを飲み一平の声を聴き落ち着いたか、はいと小さな声がし話始める。

「大河原君、パジャマ姿で胸に果物ナイフが刺さった状態で死んでいるんです」

「そりゃー驚き慌てんのも無理ない」

「今朝就業時間になつても大河原君が出てこないで事務方が電話入れました、呼び出せど出ない、大使館のあるビルの最上階は館員の住まいで所帯持ちも独身者も入居出来る様になっています、大河原君もそこに入居しています、国王来日を控え最後の詰めになっているこの頃、そんな今日大使は全員に招集をかけた、寝坊でもと事務方が彼の部屋に行きました。」

ドアにカギは掛かっていない、大河原さんと声を掛けたが返事がないので入りますと言って中に入った、1LKになって

いる、奥に進みながら大河原君と再び声を次の瞬間、事務方は固まってしまった、我に返り直通ホーンで死んでいると連絡してきた、補佐官を始め数人が直ちに部屋に私は頼まれ110番」

そーだそのように落ち着いて話を続けるんだ、と一平はさっちゃんに言う。

「私は見ていないが部屋は荒らされていたと、所轄が今来て調べ始めました。もしやと想い彼のデスクを開けてみたした、国王来日に関するバインダーやメモ書きが多いし電子辞書やら計算機地図も入っている。いつぞや開けっ放しにしてた状況と同じようでした、だが一平さんその時と違ったものが入っているのを見つけてしまったんです、USBメモリです、私のPCに入れてみてビックリ、国王暗殺と称し日付付きで四月からを日記風にしてありました、これってどーしよう」

「さっちゃん落ち着いているよな」

「はい、一平さんと一緒にいるようで、落ちついてます」

「彼は暗殺計画を知って殺されたんだ、松下翔平君と同じように」

これからどうしたらいい、落ち着きはしているが身近で殺人がおこった、幸子の言はおぼつかない。

「そのUSBメモリを小生に渡してくれ、職員に分らんよう預かっていてくれ、小生の感だが補佐官が彼のディスクに行く筈だ、彼が掴んだ暗殺の証拠を探しに、彼の部屋が荒らされたのは物取りではなくその為だ、小生を信じて預かっていてくれ」

「一平さん、私だって彼と松下君の死を無駄にしたくない、リスクあるうが真相究明に協力します、ウアー大勢の足音切るね」

一平はオフし頭ん中を整理してんのか窓越しの彩付き始めた木々を眺めている。そんな一平をまりが止めても止まらない元デカ長さん、想う存分やんなさいと言い階下に降りて行った。

出かけない時はいっぶくで昼を食する一平だが今日は降りて来ない、まりはトーストとパスタとコーヒーに新高を剥きお盆に載せお昼ですよと二階に上がって来た、キーボード叩きながらありがとう、そこに置いてつてと。

テレビをつけた、大使館員殺害は放映されない、おやと思いながらも手製のお昼を食し始める、幸子から電話が入った。

「一平さん要約解放された、気分転換に外で食べるようにしました、ただおかしいと思うの、補佐官が大河原君のデスクに来て筆記用具等は其のままだが国王来日関係は元より書類と言う書類は全て引き上げて行ったの、これ可笑しいよね、全部よ」

「うーっ引つかかるが現時点では何とも、USBメモリは無事だったかな」

「ぬかりないよ無事です、これから食事に行きますからその時送るわ」

「ありがとう、そーしてくれ、大使館の所轄は何処だ」

一平は幸子に尋ねた。

「高輪署だと思う、刑事さんが手帖掲示しながら言っていた」

「大泉と言い、明らかに顔も服装も反社会的な容姿の刑事はいなかった」

「刑事は六、七人いたけれどそれらしき刑事はいなかったようだ」

「ありがとうUSB頼むよ」

「一平さん、事が動いたら連絡します」

そーしてくれと一平は言い電話を切った。

夕刊にはピース王国大使館員、自室で刺され死亡と小さく載っていた。

大さんから電話が入る。

「一平さんご無沙汰してたな、ご存知の通りピース王国大使館員が自室で殺害された、他捜査班が担当でわしは現場には行っていない、捜査員の話だと探し物をしたようで部屋はシツチャカメツチャカだった。結局は小銭を含め現金とカードが一枚もない、物取り目当ての犯行では無かろうかと担当は言っていた」

「うーむ、物取りで終わらすつもりだな」

「一平さん、うーむとは何か引つかかるのでは」

「ガイシャは度々白家補佐官とぶつかっていたそうです、彼はこの春に採用され国王来日準備員になっている、職員になりたての彼がよほどの事でないと補佐官等目上の人に歯向かう事はしない否出来ない。と想うのだが大さんはどう想う」

それもそうだなと想い考えているのか話が途切れる、間が空き大さんが話し始めた。

「わしは引つかかる事があるんだ、捜査員や鑑識の言うには聞き込みによるとガイシャはドアロックは常日頃しないそうだ、それに果物ナイフは勿論だがドアノブには拭き取ったか指紋がないんだ、手袋をすればつかんがそれでもガイシャ等幾つかの指紋はある筈だ」

「大さんおかしいね、誰の指紋もないとは」

「それから最上階へ行くエレベーターは一階と地階の駐車場から直通なんだ、万一のに備え非常階段があり、各階からは自由に出入りできるが最上階だけは暗証番号を入力しないと開かない、警備室ヘインターホンで暗証番号を知らせる仕組みになっている、又内側からはその必要はない。一階と地階のエレベーター入り口にはカメラが設置され利用者は全てわかる、殺害のあった夜は入居職員は確認できているが他の利用者は写っていない」

「非常階段はどうだった」

「外側からの利用者はいない、ガードマンが言っている、が打ち合わせて内部から開ければカメラ写らずして入る事は可能、一平さん、わしが想うに内部の誰かが開け入れ殺害者に手を貸したんでは」

「いい推理だな、その考え方あっているかもよ」

電話ではなんだ会って話したいんだが署は目下手薄状態で暇がとれん、新たな情報が入り次第連絡すると大さんは言った。そうしてくれると助かるーと一平は電話を切りキーボードを叩き始めた。

その後大使館員殺害は忘れられたのかテレビも新聞にも載らない、一平はおやつと想いつつ数日が過ぎる、いつぶくの仕込みを始めた、まりに邪魔だと言われるも世間話を始めた。そんな折、大さんが電話してきた。

まりは大さんよきつと大事な話よ、早く出なさいと急かす。

「おはよう一平です、なにか動きでも」

大ありだと咳き込んで言い始めた。

「いいか一平さん良く聞いてくれ、わしが今から言う事は捏造や夢話ではない」

「だから何なのよ、そんなに昂奮染みた話し方大さんらしくないな」

「いや失礼した、ピース大使館員殺害事件は本庁扱いになってしまった、今朝本庁安全課が来て一切の書類証拠品を持って行ってしまったんだ」

「ナヌー真か」

「ほれ一平さんだつて声が変わった、もう一つナヌー真かと言わせたやろうか」

一平は受話器を持ち替えた、同じしてマキがおはよございますと入って来た。一平がそーか今日は土曜日かと想い大さんの話を聞き始めた。マキちゃん大事な話の様だから邪魔しないでこっちに来て私の仕込み手伝って、マキが厨房に入り誰からとまりに尋ねた。

「マキちゃんも知っているでしょ、高輪署の大泉刑事さんからよ」

「一平の黒眼がグルグルしている、よつぼどの話の内容の様だね、協力してくれている刑事さんが更迭でも」

相分り申した、午後二時にいっぶくで待っていますと一平は電話を切る。

「どうしたの誰か更迭でもされたの」

「そーじゃない、大さんからピース王国の大使館員殺害は本庁扱いになったと知らせて来た、電話ではなんだ、平常勤務に戻ったから午後開けになるんで出向くと言ってきた。二時からいっぶくも五時まで休憩に入る落ち合おうと、

大さんも了解したと切った。ここを借りるよ何時ものよーに休憩中と看板出しカーテン締めて奥のテーブルなら散策者には気付かれんだろう」

「どうぞお使い下さい、でも私も大さんの話聞いて良い」

一平はいいともとまりとマキに言った。

「旅鳥が来ているだろう、時間まで多磨霊園を一回りしてくつかマキ行くか」

「はーい、一緒に行く」

嬉しさあまりどつもつてしまふ、今ランチ作るからねとまり。

ラウンドアバウトのポイント近くに早馬口を停めた。

「おおーマキちゃん登場だね手際いいねー機材のセット、一平殿より早いじゃん」

野萱さんが言う和一平は苦笑い。

「今日はマキちゃんも来たし出がいいよ」

大久保さんが今日の出を言いながら言った。

「空抜けだが天辺にエゾビタキが止まった」

と永尾さん。

「ほれこつちのハウノキの実にキビタキが止まった」

マキは無心でファインダーに入れ連射、フーと呼吸し息を整えた、一平は後ろで双眼鏡を眺めるのみ。

「ほれ未だマキちゃんコーヒー飲んで休んでいないで撮るんだ、シジュウカラの中にコゲラが混ざっている、中程右だ」

鳥撮り猛者さん等はマキに容赦なく言う、無言で一平は双眼鏡で見ている。

野萱さんが落ちていた口調で喋り始めた。

「出が止まったようだ次に控ここで一息入れよう」

マキは中腰スタイル、疲れたか腰や手足の運動を始める、でも次は何時と猛者さん等に聞いた。

「腹も空くし出は野鳥さん達の気分次第、いつ出て来るか分からん」

やー一平さんにマキちゃんと言いながら叶山先生はハウノキの実を持って来た。

「マキちゃんこれが実だよ」

と赤く彩り市松模様を潰した様な筋が入っている、十五センチ大のハウノキの実を。

「多分カラスが悪戯し落としたんだろう、今は赤い色の花被だが褐色に熟し始めと割れ中から赤い種が顔を出す、それを野鳥さん等が食べに来るんだ、そこを私等カメラマンが狙うんだよ。褐色になり割れると言うより筋の所が捲りあがる様になる」

先生の言に散策者さん等も他カメラマンさん等も聞き入った。十一時を回った、野萱さんと大久保さんが陣払いだと言ひ機材を片付け始める、引き上げですかと皆が言う。

「この時間に引き上げるのも自分達の日課になっています」

じゃー又明日、と言ひチャリで引き揚げる、先生も出が止まった原稿書きが溜っていると引き上げた。

マキちゃん早めだが昼にしないかと永尾さんが声を掛けて来た、二時に人と会わねばならんと一平も昼にしようと相槌を打つ。

マキは大木の下にシートを敷きバスケットを解いた、タッパを取り出す、サンドが入りビックライスポールが顔を出す

「まりさんはこんなに作ってくれた、食べきれないじゃん」

「食べきれんとはマキにして珍しいな、多かつたら永尾さんに手伝って貰うとすつか」

コンビ二へ買い出しに行こうとクラウンに乗り込み始めた永尾さんにマキが声をかけた。

「永尾さん、昼はここにいます」

「一平さんとマキちゃんの分では」

「三人分あります、ご一緒にどうぞ」

忝いご馳走になります、機材はそのままにし敷物に胡坐をかいた。

「永尾さんとご一緒に昼は初めてだね」

「そうか初めてだよな、世間では次はないと言うがマキちゃん等とわしには次回はある、次は私が用意する是非とも一緒に」

鳥撮り談義しながらパクついた、これまりさんのコーヒーですよカップ出して、マキは永尾さんに声かける。

「まりさんのコーヒー以前飲んだことあるよ、一味違うんだよな」

と永尾さん。

「それ何時頃」

「いつだったかな交通違反者泣かせの元女性白バイ隊員、その人が入れたコーヒーが美味いと鳥撮り仲間でも評判になった、しかも一平殿の奥方と来たもんだ、先週行つて来たんだ」

そーこーしてたら何処からともなくピーピーと、永尾さんが叫んだアオゲラだ必ずハウノキに来るマキちゃんレディー、コーヒー零さんよう敷物に置き構えた。

来たー、辺りでは機関銃の如くシャッター音が鳴り響く。

皆はアオゲラと争い済んでモニターを眺め始める。

二十数枚撮ったが顔が映っていない、マキがぼそぼそ。

「マキちゃん見える所に移動せねば、他の人の前に出たりレンズを被せたりしない様に移動するんだ」
そこまでは気が付かなかったとマキが言った。

「マキちゃんならすぐ出来る様になれる」

有難うございます永尾さん、頑張りますとマキ。

まりから電話が、乗り換えがスムーズにいき大さんが今着いたよ帰って来てと、相分ったと言いつつた。

「永尾さん、客人が予定より早く着いた陣払い致す、まりにコーヒー美味かつたと伝えておきます」

「また行くと伝えておいて下さい」

午後鳥撮りし続けている皆に挨拶し一平とマキは早馬車に跨がった。

休憩中のいつぷくで大さんは松宮刑事と一緒にまりを相手にコーヒーを嗜んでいる。

「待たせてすまなかつたな」

と一平とマキが格子戸を開け入って来た。

「一平さん急かせてすまなかつたな、乗り継ぎが上手く行き過ぎて、今チーズケーキ頂いた所だ」

「構わん、昼を食べ皆と鳥談議しとつたらアオゲラさんが登場、撮り終わし一息入れていたんだ」

アオゲラとはどんな鳥、普段見られるんですかと松宮刑事が言った。

「ハトぐらいの大きさで一見緑色をしている、キツツキの仲間で日本の固有種、平地から山地の林に生息し都市部の公園でも見かける事も多いんです、多分松ちゃんや大さんも幹をコツコツしている脇を通ったりして」

神代植物公園へバラを見に来た時にでも注意してみよう、で一平さんと大さんは向き直った。

「掻い摘んど電話で言った通り、ピース王国大使館員殺害事件は本庁扱いになってしまった」

「署員も無念がつているだろうな」

「無念と言うより悔しさ頻りだ、それと何でかと署員は」

「安心安全課と言えば殺人事件とは離れた課、昨年キスゲ橋での転落死を扱った課だよな何かあるな」

あそこで殺人事件捜査等出来る訳がはない、と言いながら大さんはコーヒーを飲み干しまりを見た、まりがお代わりの準備を始めた。

「いやーまりさん、今日はやけに喉が渴くんぞな」

「今ボロボロ始めたからもう少し待ってて」

すまんーと言い、続きを始めた。

「ガイシヤは何時も部屋のドアは鍵は掛けていないと職員が証言している、誰でも入り込むことは可能、だけどこの部屋に一般人が入るのは不可能、セキュリティが確りして近寄る事も出来ない、セキュリティ事情を知る者か職員ならばだが」

「大さんはどー見ている」

一平は問いかけた。

「物取りに見せかけた殺人ではと」

「穏やかでないねーそれは、何の為に誰が大使館員を殺ったのか」

一平は遅ればせながら冷えかけたコーヒーを口にし大さんに聞いた。

「キスゲ橋同様口封じの為だ」

「大さんもキスゲ橋の件、転落死ではなく殺人とでも」

「そう想いたくなくなってしまう、今回も特定は出来んが白石補佐官等の良かならぬ企てをガイシヤに知れてしまった、消さねばと、あのキザ監察官も一枚も二枚も絡んでいるのでは」

大さんお持ちどう様、熱いよ気を付けてとまりがコーヒーを持って来た、平穩を装っている一平だが眼が大きくなっているのをまりは見逃さない。

ありがとう、コーヒーを啜り飲み始め興奮気味に大さんは話す。

「生活安全課、立野辺課長はキザ監察官と同郷でもあるし大学の後輩、キザ監察官の息の掛かった課長だ、部下の岡村巡查長が言うにはキザ監察官の言いなりと言っていた、真実もあつたもんじゃーない」

で、一平はこれからだと言う。

大さんはこれからはまだだとコーヒーを飲んだ。

「監察官付けの年齢不明なお嬢さんを知っているだろう、彼女から遅くなったが今朝連絡が入ったんだ、私がお茶を入れたり揃えもんを始めた、今回も私がいても平気、ペース乱さず話しているんです」

「大さん分かったよ、その時の電話の内容を話したいんだな」

一平さんそうだ聞いてくれと、又コーヒーを一口飲んだ。

「バアーさんが言うには否監察官室付けのお嬢さんが言うには、おおそうだ、一平さんの前ではバアーさんでいいな、そそんでだなー」

吃音ながら言う、そんな大さんにマキがコーヒーどうぞと前に寄せた。

すまん吃っちゃつてと飲み干した。

「誰との電話かは分らんが金目当ての犯行にしよう、その様に各部署には私から通達を出しておく、証拠等書類の提出を求められたら直ちに出席する様整理揃えておくようにと、バアーさんがいるにも関わらず話してたんだって。一平さんどーだこの電話」

「察しはつく、息の掛かった生活安全課立野辺課長だろう。もみ消しも甚だしい、殺された大使館員が泛ばれんよ、監察官が何故にその様な行動をとっているのかだよ大さん、殺人にも加担しているんだろうか」

「現職の監察官が人殺しはしないと想う、が シャルム一等書記官や白石補佐官には黒い噂がたっている、関係があるんでは、立野辺課長に事情聴取の手もあるんでは」

「大さん、小生も考えなくはないが無理だ、あいつ等の事電話の内容では逃げの一手も考えている、証拠が出てこなければ誰彼なく即更迭もんだ」

と言い一平はトイレにたつた。カウンター内にいるまりに大さんは声を掛けた。

「一平さんはマトリ方式を考えている様だがそんな事聞いた事ない」

マトリって何とマキが聞いた。

「厚労省の職員で麻薬専従の拳銃所持捜査官をマトリと呼ぶんだ」

任意同行等はせず確信を掴み即逮捕にふみきるんだと大さん、フーンとマキ。

「では一平はマトリ方式とやらをどうするんだろ」

マキが言い始めたが大さんは制しまりに話を向けた。

「一平さんはマトリ方式を滲ませた様な事は言っていなかったでしょう」

「あれはマキちゃんが襲われた時言っていました、小生は一庶民、皆が協力してくれるのはありがたいが小生事だ、他に危害が及んでしまつての捜査協力は、と一平は口籠っていた」

「警視庁上部も絡んでいるのは定かだ、現役警察官が処分でもされたら」

まりがそう言った、すかさずマキがそれについてどう言う事なのとまりに迫った。

「これ以上取り巻く人達に危害があつてはならん、私は構わないと言つたらそうか有難うだつて、途中で思ひき犯人に接すはタブー、確信を持つてから乗り込むんだ、珍しくベットでレミーマルタンを傾けながら言っていた、それって一平流のマトリ方式よね」

「トイレから出て来たらその話は聞かなかった事にしといて、大さんもマキちゃんも」

あースッキリしたと一平が出て来た、コーヒー空じゃないか皆の分も一緒に頼むとまりに。

「大さん、キザ監察官と大使館の反国王派が繋がったな」

と洗面所に通じるドアを閉めながら一平が言い、これからだがとあちちしながらコーヒーを一口。同じして宅急便ですと格子戸を叩く音、さっちゃんからです、開けていいと言いつつ終わらんうちにマキが開け始めた。走り書きと想える筆跡で一平さん、とり急ぎ送りました、幸子と記されメモ用紙とUSBメモリが落ちた。

すぐさまPCに差し込んだ、さっちゃんが言っていた様な事がパラパラ出て来る、今までの捜査と変わらないが幾つかの

事実が出て来た。

○月○日女を軟禁せよとか射撃の名手

○月○日わし等の情報どこから洩れている

○月○日作戦に失敗は許られせんとラルフ中島から電話

等々月日入りで記入されている。

○月○日前月より本国との電話が倍以上使用

○月○日一週間前不明出金があった、過去の出納帳を確認すると九回目だ

○月○日相谷監察官との連絡もより多くなる

○月○日BMWの使用禁止、わしのXJ使え

井の頭で痛い目に遇わせたねーちゃんを取り巻く者達、どこまでかは分からんが嗅ぎ付けている。

等々だ、まだあるが先ずは休憩だ、一平は立ち上がり手足を伸ばした。

「一平さんこれからどう行動とつたらいいか教えてくれ、俺にも松宮にも」

「有難う、小生は軽はずみな行動はとらんマトリで行く、このUSBメモリコピーし渡す、オフの時にでも目の違った所で見てくれないか、どうかに言うか盲点も、乗り込み時期が潜んでいる様な気がする、どんな些細な事でもいー見つかつたら連絡してくれ」

「無論連絡する、が俺たち抜きで丸腰で一人乗り込みは許さんで」

一平の眼を見ながら大さんが言う、何時もの様に一平の黒目が大きくならず、がいつもより瞬きが多くなっているのを大さんは。

空のUSBメモリを取りに行つて来ると一平は二階に上がつて行つた、大さんはそれとなく捜査状況をまりとマキや松宮に話し始めた。

「1GBのUSBしかないが画像が無ければ十分だろう、早速コピーしよう」

USBコネクタに差し込んだ、画像は無いと見え直ぐコピーは完了する。

それらを皆に配った、何が何処にあるかは分らん、だけど殺害に及ぶ何かは何処かにある、見つけてくれ、この件はまりを含めこの五人しか知らんと一平、キツとし大さん等はノートPCを見続けた。

「一平、それ以外は大使館員に繋がる様な事は、でもちよつとこれと」

マキが言った。

「射撃名手の女って特殊隊の寺島加奈ではないだろうか」

「マキちゃんもそう想うかわしも想っていたところだ、彼女を動かすには金が掛るだろう、が彼女は要求しておらんのだろう、代わりと言っちゃー何だが、今のところ臆測しか言いようがないが、キザ監察官なら金で動くのでは、白家補佐官は金を使って動かしした」

「皆、いいところ突くなー、小生もそー想っていたんだ」

BMWは彼女の車で必要以上に使用するとアシが付くとも限らん、使用禁止にしたのではと松宮が言う。

「何時ぞやまりさんが言っていた数式、加減乗除は違っても今箇条書きにしたものを足してみても箇条書き数で割ってみたら答えは何になる」

「答えて殺人」

とマキが言う。

「その数式あつてな、反国王派は知り過ぎた大使館員をその為に殺したんだ」

マキが更にキスゲ橋の転落死はと付け加えた。

「キスゲ橋も同様に知り過ぎたからだ、ドローンの前方に刃物をセットし巧みに下半身を攻めた、松下翔平は否応なしに欄干に凭れ掛かるよう足を引っ込める、欄干に追い詰められ止めとばかりに顔面にヒットさせ転落させた」

「大さんの推理通りだ、あれは転落死ではなく殺人、キザ監察官や反国王派が関わっている」

寺島加奈はどこで監禁いや軟禁されているか、キザ監察官の行動及び白家補佐官の動向も気になる、ドローンの操縦者室井禎一は目黒にいる。次に来るは国王暗殺だ、それは何時何処でだと一平流に皆に淡々と語った。

「明日から小生は目立たんよう、変装もし確信を得るために彼らを見張る予定」

マキが自分もすると言う、制すれど幼稚園を確り努め挙げた後ならと一平、ガッテンと握り拳を作った、大さんと松ちゃんは親指を立てた。

表で黄色い声がする、格子戸を開け府中署稲垣巡查長が交通課の婦警さんを引き連れ入って来た。

「おお一平さん、いつぞやの婦警さん等に内緒で来た、そこまで来たら見つかつてしまったんだ、その奢りにと迫られ今となった。夕食だサンド、パスタにレアチーズ、コーヒーをまりさんお願い、勘定は私に」

六時半を回っている、まりスマイルを浮かべ今作るからねと。

おつ、こんな時間になっていたかと一平、斜め後ろの開店祝いに頂いた年代物の古時計を見た。

「キスゲ橋転落死、あれは殺人に間違いなし、レディーガガブランドの香水をつけた女いや男かも知れん、香水と一緒にラジコンヘリ等の電池も落ちていた、それらを使用した奴等が絡んでいる」

と巡查長は言った。

「マキちゃんは知っているが他のお二方は何方様、今宵は如何様な集まりですか」

一平の瞬きが早くなった。

「高輪署の大泉警部補と松宮刑事です、再三お断りしてんだが根負けして今日となった、新人の松宮刑事に小生の刑事魂とやらや武勇伝、検挙率百パーの一平流極意を若い刑事に叩き込んで欲しい、一時ほど話させて頂き今終わった所だ」

「府中署交通課の稲垣です、宜しく願います。一平さんとは年は違うが気が合うんだ、公私共に付き合わせて

頂いているんだ、松宮さんとやらはどうだった一平流は」

「どれもこれも真剣に聞き入った、末尾で我々の任務は市民の安心安全と真実にある、それに失敗はタブー、即ち非が自分にあるならば即身を引くにある。で締めくくった」

一平さんらしい講義だったようだ、ガキさんは頭を掻き始め一平を見た。

大さんも松ちゃんも慣れぬ演技にガキさんに分らんようため息、一平は二人に眼で礼を言った。

婦警さんも任務が終り署を離れば普通の女性、今風の着こなしもあればカジュアル風も、マキの右隣にいるイケメン刑事が気になるようだ、食しながら時折視線を向けている。

ガキさんも入れてくれと加わり小一時間、ポケモンGO、ペナントレースの行方等世間談義に花が咲いた。

「あー美味しかった、ガキさんご馳走様次は何時にしようかな」

親分肌の婦警さんが言う。

「やつぱし俺が払うのか何がご馳走様だ、何が次はだい」

「ガキさん何か言った、調布駅まで送ってよお願い」

帳場で支払するガキさんにまりは毎度有難うございますと丁寧に、皆にじやーと右手を挙げ婦警さんに続いた。

「大さん有難う、稲垣巡査長は若いのに肝が据わったと言うか怖さ知らず、職務以外もなんのその、刑事課の案件でも平気で首突っ込む、キスゲ橋もそーだ一人、証拠は残っていないか藪に入り探すんだ、見つけたよと先にも言った香水と電池を、これらを使用していた人物がと小生に迫った事があった。未だ署内では発覚されていない様だが彼には引っ込み踏みとどまる事を知らない。そんな事を想うと彼には今回の件は知らせないでいる」

「若さゆえだろう、俺もそんな時期があったような気がする、松ちゃん頼むよ」

「僕には警部補もいれば一平さんもいます、早とちりと言うか勝手たる行動とかは僕のHDには無い、目の前の事に視野を広げ進むだけです。あつけない忘れる所だった、マキちゃんもいます」

何の事だろうと厨房の棚に載っているマメの瓶を眺めるマキ、察したか一平と大さんの口元が緩んだ。

ねー、一平に大さん松ちゃんとマキが言い出した。

ほー来たなと一平と大さんはほくそ笑んだが次の言葉で断ち切れた。

「キスゲ橋下で翔平さんが血で書いたり乙の様な文字、意識朦朧とした状態では正式な文字など書ける訳がない、でも薄れゆく意識の中で犯人を示そうと必死で書いたんじゃないか」

「で、それが犯人にどー繋がるって言うのか」

「足し算よ、加えれば答えが出て来る」

厨房のまりもマキちゃんいい事言うねと言いたげだがはてなと首を傾ける。

「皆どうしたの」

じれったそうにマキが言い出した。

「上下に分かれているからわかんなかったの、りと乙を重ねたら何になるそれが答えよ」とA4紙に大きく描きだした。

「まずはりね、そんでその上に乙を、り＋乙は白になります、書き残された文字を無理やりにとありますが、白家補佐官の白です、日とも読めるが自分は白と見た」

大さんも松ちゃんも納得、マキでかしたぞと一平が肩を寄せた、まりもVサイン。

「でもマキちゃんどうしてこれが白だと」

「まりさんが言っていた数式もあります、答えが3になるように加減徐徐してけばいいと、そんな事で足したら何に、最初は(りおつ)とか読んでいた、これでは答えにならない。幼稚園のある日、お絵描き教室をしていました。車好きな男の子がバスの絵を描いていました、隣におかつば風な女の子が、バス上手に描かれていますと花丸を、でもこの女の子はだーれと聞いた。〇〇ちゃんだよと返ってきた。可愛いく描けていますと言いいこれも花丸を付けてあげました。でも窓の所

に描けば可愛い子ちゃんが楽しくバスに乗っているように見みえるよと言うと、男の子は窓に可愛い子ちゃんを描いた。さつきの絵と違ってほーらバスが走り楽しく乗っているようにも見えるでしょ、花丸を付け終わった後、自分はハツとし気付いた、暗号めいたり乙を重ねれば文字になると」

興奮気味に話すマキは冷やしコーヒーをがぶ飲みする、だけんど一平は空間を見る如く神妙な表情。

「一平さん、一平さんの胸の内を明かそうか」

と大さんが語り掛けた。

「小生の胸の内を見られてしまったか」

と一平は深呼吸する。

意を決し大さんが言い始める。

「さつきも言った通り、キザ監察官の情報屋田川とラジコンヘリ操縦者室井禎一、この二人のヤサは判明している、必ず近日中に動きがある筈だ、小生はヤサ近辺を探る予定だ、と同じして大使館近辺も、大さんも松ちゃんも隙間があつたらそれとなくお願いしたい、そうだろう一平さん」

「図星だ、お願いします」

任せとけとばかりにキツと一平を見、肯いた。

マキが自分には頼まんかと指さし一平を見た。

「言わんかて分かってんだろう」

その言葉にマキは大きなVサイン。

「松、聞いての通りだ、一平さんの言う真実究明にわし等の出来る事を」

と大さんは言い、でもと一平に向き直ったが一平が制した。

「大さんの言わんとしている事は分かっている、今は更なる情報が必要だ集めてくれ！」

ただならぬ毅然とした言と表情の一平に皆は無言でコックリせざるを得なかった。

いづぶくの一点を見つめコーヒーを嗜んでいる一平、父娘同然のマキでさへ口出せぬでいる、厨房のまりは傍にいる松ちゃんに目配せし大さんに寄った。

「ゴメンね、あーなつてしまおうとガンとし我が道を行くが如し、信念を返ようとはしない例え上司であつても、刑事部長から番度とは言い兼ねますが電話がありました、縦割り行政もどこ吹く風ですご主人を何とかしてくれと、私に出来るものならば何なりと仰せ下さい。だけれど皆さん方に出来なければなんぞ私に出来よーです、いつぞや上司さんに言いました。それからと言うもの電話は掛けて来る事はありませんでした、今の一平は誰が何言つても無理です、レミールマルタンを飲み、今宵寝れば明朝には何もなかったようにオハヨーと起きて来ます、大さん明日にすれば話に進展があると想います」

まりが一平そのコーヒーは空ですよ、今日は疲れているシャワー浴び、レミールマルタンを飲みベットに入ったらいかがですかと。

大泉警部補も無言でまりに向き直り相分った、と言い松宮刑事とマキに頷きし首を格子戸の方に傾けた。歩道に出た三人はハイタッチし明日からだ進展がある筈だと確信する。

国王来日にそれは起きる、九月半ばだ、もたつてはいられない動かぬ証拠を掴まん事には、ベットに入り天井の模様を虚ろな眼して眺めている。もー一人の一平が言い出した、(何を躊躇しとんねん、キザ監察官、情報屋の田川とドローン操縦士元大学生の室井とケンとアキ、ピース大使館のシャルム一等書記官、白家補佐官をマークしろ)ってな事、一平は何時しか眠りについてた。

ただいまと朝散から帰って来る。

「快適な目覚めの様だったね何か良い夢でも見たの」

と、まりが聞いた。

「ベットに入りぼんやり天井見とつたら誰だか分らんが囁くが如く言い出した、次の人物をマークせよと、見えぬ囁き人に相分つたと返事したんだ」

「その囁き人が快適な眠りを誘って下さったんですね」

「そこかも知れんな、ところで今朝の飯は何だ、キノコの香りがするが」

「ピンポン昨日の昼番組でお天気お兄さんが言っていました、夏日続き為れど明朝は平温並いや寒さを感じるかも知れませんが、気温の変化に注意して下さいと、更に鍋が恋しくなるでしょう、といつもながらのユーモアを交えて天気予報していました、そんな訳で今朝はキノコ鍋で夕飯も鍋の予定です」

「夏仕様では涼しいと言うよりは寒かった、暖かいものが食べたかったところだ」

二人はテーブルを挟んで向き合い、ナスとカブのヌカ漬けを友にタラ入りキノコ鍋をフーフーしながら食した。終わりのかけの頃ルパン三世が喚いた、おつはよー、元氣していますかとマキが。

「今日は土曜日幼稚園は休み、お昼に寿司政のランチ食べに行こうよ」

「食したいが白金界限に張り込みに行く、寿司政は次回だ、それよりもマキに頼みたい事があるんだが」

「そうこなくっちゃー、いつもの一平に戻ったよな、あー良かった昨夜のままではどうなる事かと、何を」

「昨日、何かあったんけ」

「いやーそのーと口籠るマキを察したか事情を知るまりは席を立ち、流しに向かい気付かれんようふふうつと含み笑

い。
「何をと聞いてきている、早く教えてあげたら」

流しで食器をガチャガチャさせながらまりが言った。

「昨夜、天井から数人の人物をマークせよと御達しがあつた、手始めに午前中キザ監察官の自宅付近でうろついてい

てくれ、何でもいいから気が付いたらメモっというて、それから見張り、張り込み等が分らんような服装、マキバージョンはご法度、その街に溶け込める服装で」

「あいよ任せというて」

「小生は白金辺りをうろつき、昼にレストラン白金で落ち合おう」

昼ちよい過ぎレストラン前で二人はあっていた、マキは一平の忠告を守りここで見かける極普通の装い。後ろからではマキとは分らなかったと一平、入ろうと言い背にそつと手を当て中に。

「マキバージョンやめろ、さつき言っただけじゃーないの忘れたの」

マキが口をとんがらす。

「おーそう言いたよなごめん、忘れてた」

「そんな事より腹減ったよ頼もう、何でもいいでしょう」

「パスタにピザそれにポタージュスープ」

取り敢えずそこまでとマキ、一平はジャンボトーストとグラタンにコーヒー。

向き合うように座り一平はマキを見た、すっぴんで薄い二ナリツチのサングラスを掛けているが吉祥寺でもここ白金でも見かける普通の女性がいた。

「何か顔に付いている、そんなにじろじろ見て」

「いや何にも付いていない、吉祥寺の方はどーだった動きがあった」

「久々の晴れと言うのにキザ監察官宅には洗濯もんが干してない、一人張り込みは始めてなのでどうすれば良いかと思つた、時間を置いて通りすがりを装い少しずつ衣装を替え張る事にした、時には自転車も利用した、何度通っても代り映えなし、午前中は留守ではと」

「さすがはマキだ良くその方法想いついたな、これからもそれで頼むよ」

「意外に多く出っかしたのは宅急便、郵便屋さんより多かったみたい」

「その宅急便だ、キザ監察官宅に配達がある筈だ、しかもA4サイズで一寸厚位の書類、小生の感だが近日中送られてくる、当然偽名だろうが送り主は誰かだ」

「その感だけど誰」

「ピース大使館の自家補佐官から書類ではなく現ナマだ、二千万は包んである」

「カナ振りだつたら」

「無論それもだが一%でも可能性があれば足で捜査しなければならない、いーかマキ宅急便に限らずこの宅配業者でもキザ監察官に届け物があつた時は、日時、業者名、大きさはどの位だったか、多分バックドア等に運転者名が記されている、それもメモつとくように」

「現ナマだつたら本人宅に送らないのでは」

「監察官室詰めの人が言うのに、遠慮がちではあつたが最近はひそひそ、タブー話と想える事でも平気で指図したり相槌を打ったりしているそーだ。明らかにキザ監察官は焦り始めている、書類授受は他人を頼んだり場所替える余裕がない。考えによっちゃー探りを入れ始めた奴等の盲点ではとキザ監察官は見た、自宅が何所よりも安全だし他人を雇わなくてもすむ、偽名も使わず堂々と受け取れる」

「一%だつたよね明日、九時から二十一時まで食事と休憩と称する時間は別にして頑張ってみる」

「有難う、明日は小生も吉祥寺にしよう」

「わーい一平と張り込みだ嬉しくなっちゃう」

一平はジャンボトーストの最後の一切れを頬張りコーヒーのお代わりを店員さんに言う。

「午後は相谷監察官の情報屋田川を追った、一時少し過ぎた頃高輪のマンションを出て場外馬券場に、数レースやつたようだが浮かぬ顔で出て来た、歩きながらパンかじり高輪のパチンコ屋に入った、ここで一日が終わってしまうだろ

う」

「食休みしたら張り込みがてらパチンコでもやってみようよ」

「小生、学生時代玉を指で入れて弾くのしか知らない、今のはつまみをちよこつと捻ればトントコトントコ出て来るやつではないのか、レミーマルタン一本分直ぐ無くなっちゃう」

「張り込みだ何事も経験、自分の分は自分で出します、一平行くよ」

「このランチも自分持ちではないのかと一平は尻から財布を出した。

入って一時間、田川は動かん足元に箱が三つ積んである。

「ボトル軽く一本、もー終わりにするよ」

と一平はマキに声をかけた。

「出始まったところ今は無理だ」

「新たな情報はないかこの界限を散策してくる、田川から眼を離すなよ」

「あいよー、一本分取り戻すからね」

「後ほど例のレストラン前で落ち合おう」

五時少し過ぎ、一平何処にいるの直ぐ来られる、田川が終わるらしいとマキが電話した。

「五分程で行ける、間に合わんきゃー台そのまま後終え」

「分かった、でも早く来てボトル二本にはなるよ」

久し振りに走った、田川はジョットカウンター中、間に合ったホッとしマキを見た、足元を見ると指さす。

ボトル代稼いだと重そうな箱が二箱、一平は慌ててマキを背後にマキは田川に面がわれているきわどい所だった、両手を合わせすまんの仕草。

「小生は後をつける、多分晩飯かマンションだろう、玉の整理が終わったら落ち合おう」

「了解、これで晩飯代も出たね」

田川は居酒屋風暖簾をくぐった、構えからして大きそうだ気付かれんよう席を取ればいい。

重い引き違い戸を開けた、奥にカウンターがあり囲むように大小の無垢材のテーブルが十五卓ほど、田川はカウンターに腰かけている、直接見られんが安全策を取ってマキを背合わせに座らせた、ここかしこの壁に品書きしてはある、いらつしゃいと店員さんが麦茶におしぼりとメニューを置いていく。

「情報屋田川は今日は動きなしと見た、小生等も一日の締めとしよう、まずはジョッキと肴、そんで夕飯で行こう」

「煮物にえーとサンマにイワシの塩焼き」

とマキは店員さんに告げた。

「だけんど、よー出たなーあの台、一平ご用達のレミーマルタン帰りに買ってとこ、この店も自分が出すよ」

「うひゃーありがとう、小生の記憶では初めてかな」

「偶にはいいじゃん、こんな張り込みだったらいつでも引き受けするよ」

そーこー言っていたらお待ちどうさま、サンマとイワシが登場、ジョッキも今日の終わりにカンパイとマキ。

「七時を回った所だな、頼みたい事があるんだ長沼健二郎さんはまだいるかな」

と一平はガラケイをプッシュした、

「長沼さんつての三鷹営業所の所長さん」

そーだ、呼んでいるんだが出んかと一平は持ち替えた お待てせしました、宅急便三鷹営業所でございますと聞きなれた女性の声。

「榊原千賀子さんだね、ご無沙汰しています谷端 一平です」

はっはーい、榊原ですと驚きと言うか嬉しさと言うか興奮気味な声。

「どーしたんだいそんなに慌てた様な、受話器から伝わって来るよ」

「久方振りな電話にびっくりしたんだ、でも落ち着きました長沼所長は帰られました。が私で分かる事があればお伺いします」

「いやー前振りなくの電話ご容赦、では早速、千賀ちゃん吉祥寺南町の配送営業所は何処になるかな」

「営業所と言うより南町センターが受け持っています、で何か」

「そのセンターと三鷹営業所は繋がりはあるかな」

「勿論あります、隣同士連絡は常にです」

「千賀ちゃんと想い願います」

「任せて、出来る事は何なりと、明朝所長にも話しておきます」

「明日以降、吉祥寺南町の相谷茂樹宅に書類と称し小包が配送される筈だ、配送確認が取れたならば速やかに小生に連絡してほしいんだ」

「なーんだそんな事です。かおやすいご用です」

と返事はしたが退社時間になってしまいました、では明朝と言って榊原千賀子は電話を切った。

二人は芋焼酎のロックをお代わりする、一平の黒目が忙しない動きを始めた二テーブル先のカウンター席、ふらふらと情報屋田川が立ち上がった。引き上げかと一平は眼で追いながら言う。

「出て行くようだったら小生は後をつける、ここの勘定頼むぞ」

マキはいよいよコックリ。

間入れず二人は気が抜けたように大きなため息、田川はトイレのドアを開け中に入って行った。念の為と一平は後を追う、程なくして一平が先に出て来た。

やれやれと言った表情だ。

「図体はでかく筋肉隆々としてるが、アルコールは弱いと見え於保つかぬ足取りで真っ直ぐ歩けねーの」

「いっぱい飲んだんじゃーない或いは強い酒とか」

「両方違うな、小生等はジョッキにロックを二杯、いくら早く飲んだってそれ以上は無理ってーもん、ここは居酒屋、品書きにも記されているように度数の高いな酒は置いてない、ほら出て来たあの千鳥足」

「もう止せばいいのに何か店員さんに告げているよ」

「本人の自由ってーもん、飲みたければ飲みゃーいいんだ、けどこの先どー転ぶか分らんロックは終わりにし腹ごしらいしよう、品書きに写真入りで焼きおにぎりが載っていた、美味そうだそれで行こう」

田川はお湯割りを二杯飲むとレジに移動。

「小生は後をつける、ガラケイで連絡する」

あいよ、マキの気風の言い返事が返る。

田川は自宅に戻るようだ、マンション方向に歩を進めるが大の大人の歩き方ではない、エントランスホールの分厚いガラス戸を肩で押しながら入った、ここでマキが合流する。

「エレベーターに乗った所だ何階に降りるかな、マキ窓側に回ってくれ部屋に入れば灯が付く、そこが彼の階であり部屋だ」

「三階の右から三番目の灯がついた」

「さしづめ部屋番は303だな」

「あんなに酔ってて田川はシャワー浴びるだろうか」

「浴びんな、着の身着のままですボタンだろう、それまでに十分とは掛からんだろう」

仕事帰りか家路に急ぐか人通りは絶えない、仲睦まじいカップルは歩を止め見詰め合い語らっている、一平は303号室が見渡せる壁際にマキの背を当て壁ドン、予期せぬ一平の行動にマキは眼を白黒させた。

「驚かせてゴメン、この時間ただ突っ立ってマンション見張っていたら不審者と想われ気味、こーしていれば年の差カップ

ルが語らいしているしか見えんだろう」

我に返ったか、マキが不満げになーんだつまんないのと言いまも一平に。

「じゃー、顎グイに肩グイもいっぱいね」

一平はぎこちなくそれらしきを、303号室の明りが消えた。

「よっしゃー、今宵の張り込みとグイは終わりや」

明かりが消えなければいいのと言いたげにマキは了解、一平の計らいかマキが要求したか白金台駅まで二人は腰グイで。

いっぶくの階上で一平とまりは食後、ラジオの朝番組を聞きつつ狭山茶を飲んでた、徐に一平が言い出した。

「なーまり、壁ドンとか顎グイとか聞いた事あるだろう」

「今時の若きカップルさん達に流行っているでしょーそれって」

「昨夜マキと張り込んでいたんだ、やたらとマンションの一角を見つめていたんだ、通りすがりの人達が変な人達、不審者かもといった顔して行き過ぎるんだ」

「でどうなさいました」

「咄嗟に年の差カップルを装った、ぎこちないながらも壁ドンとか顎グイに挑戦したんだ、ビルの間から上弦の月が見えるよとか・・・、十分弱だったか何を言ってたか覚えておらん」

「でもマキちゃん喜んでしょ」

「喜んでくれたはいいが小生、初めてなもんで昨夜は中々寝付かなかった」

「どうりで散々寝返り打っていました」

「でだー、まり、そのドンとかグイとやらを練習させてもらえんだろうか」

「バツカ言ってるじゃーないよ、でも一平の頼みとあらばバツカ限りではごさいませぬ。初めての場合はストレートに壁ドン、顎、肩グイでは警戒すると言うか構えられてしまう、双方きこちなさも一入。ではどうすれば良いかと言うと壁ドンの場合はドンドンと二回にしてつく、そうすればアレツアレ、なんだろうと余裕を持たせてあげる。いきなりドンじゃー誰だつて慌ててしまう、マキちゃんに上手にできたの」

「マキは突然のドンで背に汗がと言っていた、でも、まり良く知っているじゃーない、経験あるのか誰に教わった」
「あら一平、やいてんのねー、この間の同窓会でさとみが言っていた。年下のボーイフレンドにそういう風に指導しているんだつて、そうしたら意外とスムーズにと」

朝っぱらだがこれからの二人はいかよーに、無念ながらルパン三世が割り込んで来た。

「おはようございます宅急便三鷹営業所の長沼です、朝飯終わったかな」

「おつはよー、お茶を飲んでいる、今終わった所だ」

「よっしゃー、話は千賀ちゃんから聞いたぜ早速だが今朝ヒットした、今日の一六時から一八時に吉祥寺南町の相谷茂樹宅に小荷物便だ」

「差出人は誰からだか分かるかな」

「一平さん俺を誰と心得ている、抜かりないよ恵比寿のコンビニ扱いで差出人はなー」

「ひよつとしたら夏目浩二では」

「一平さん何で知っているんだその通りだ、差出人は夏目浩二になっている」

「品名に書類と記されてはいないか」

「申し訳ない、目下そこまでは分かっておらんがこれから配送センターに行つて来る待つてつてくれ」

「いやーすまんや、でも話はオープンせんよーに、センターで不審がられんよーに」

又もや抜かりないを使うがセンター長とは飲み仲間だ、気心知れている一つ返事だと。

「ありがたい、午前中は確認事がある、昼前には終わるだろう奢るよ田舎でランチはどうだい」

「了解だ田舎で」

一平とマキは情報屋田川のマンション付近にいた、通行人に紛れそれとなく田川を張っていた、エントランスホールから出て来た、方向先から見て場外馬券場のようだ。勝ったか負けたか不明だが昨日同様に2、3レース楽しんだようだ、コンビニでにぎりを購入し高輪のパチンコ店に。

「昨日と同じだ今日も大きな動きなしと見た、吉祥寺に行こう」

とマキに言い白金高輪駅に消えた。

ここん所のマキは涼しくなったか或いは一平の忠告に徹しているか街に溶け込んだ装い。

座席はアリの入り込む隙間もない程寄り添うマキ、そんなマキに話し始めた。

「なーマキ、今日は九月二十日だピース国王来日まで後二週間、亡くなった大河原健三メモをマキならどうみる、小生は未だ整理付かんのだ」

「何言ってるのよー平らしくないね、反国王派が暗殺企んでんのよ決まってるじゃん」

「そーかマキもそー想ってるのか」

「あつたりきよ、序でに自分を病院に送ってくれたチンピラ二人、ひっ捕まえてやる」

「田川は国王暗殺に関わっているのだろうか、そーだとすれば役職は何だろうか、ここん所の振る舞いを見ると、我関知せず我が道を行くだが」

「キーマンとも言える様な役職では、今はその為の充電してるんでは」

「マキもいいとこ突くな、で動きがあるとすればいつだろう」

「分ければ苦労しないよー平もそう思うだろ」

「あいやごめん」

と一平は言い、左腕をとり迫り寄るマキを支えた、荻窪を過ぎた頃。

「もし、暗殺があるとすればどこでたと一平は想ってんの」とマキが問した。

「八丈島だ、それしかない」

「阻止しに八丈に行くんでしょ、その時は自分も一緒にだよ」
僅かながら一平はコックリをしたが胸中には。

十二時を少し回った、いなかの暖簾をくぐると板さんのラッシャイの声、昼時だ八部通り埋まっていた、奥の小上がりで長沼所長がここだと手招きする。

「遅れてしまったな、先を越されたかすまん」

「十分では遅れには入らんをそれより榊原君も一緒に宜しく」

「構わん千賀ちゃんじゃダメだとは言えんよ、それより何にするかな」

「もー頼んじやったよ、板さんお勧め海鮮ランチを」

「ほーそうか美味そーなランチだな、四人揃うなんて久し振りやないか取り敢えずお茶で乾杯と行こうか」

四人は湯のみ茶碗を軽く挙げカチーンと音をさせた。

「一平さんとマキちゃんと外食なんて初めてで嬉しくて、昼、食べに行つて来ると所長が言うもんだから今日、私は弁当持って来なかった、どうすれば良いんですかと迫った。無言で着いて来いと、と言う事でこうなりました」

「食事は大勢の方がより美味いと聞く、美味しく頂く事にしよう」

所長が頼んでくれたか早い、言い終わらん内に海鮮ランチが座卓に運ばれてきた、数々の魚介類煮物と切り身の皿と板さん特製の燻し魚が出て来た、ご飯のお代わりはご自由にといい厨房に戻った。うつひゃー凄い量、頑張つて食べちゃお、と千賀ちゃん言う。

「私共には時間がある、食しながら話させて頂くが」

「構わんよ、話聴きたいが為にランチ誘ったんだお願いします」

「小荷物は一平さんの言う通りA4大の大きさを書類と記されている」

「一寸厚ぐらいならば小生の想っているところです、それは配達された時、確認します」

「今日は日曜日だし天気も良し、ここに来るときそこを回って来たんだ。洗濯物が干してあった、在宅しているものと思うし受け渡しは今日間違いないし」

「その際の受け渡し受領書、指紋採取と筆跡鑑定の為小生に貸してほしい」

「それはセンターで保管する事になっている、がコピーし一時保管する事にし返却を前提にお貸しします」

「ありがとうそーしてくれ、なんせ警察手帖もない小生の捜査、動かぬ証拠が必要なんだ」

略食べ終わった頃、千賀ちゃんが皆は何って言っているのかと先程より浮ぬ顔をしている、所長が察したか言う。

「千賀ちゃん、今日のお昼は四人で海鮮ランチ食した、それだけ覚えていてくれればいいんだ」

又、ランチに連れてつてくれればいいと言いたげな千賀ちゃんにマキが言い出した。

「大丈夫、所長さんも一平もそんな所そこいらの男とは違う、ランチに限らずデナーだって瀬祭置いてある店だってオツケーよ、一平そうだよね」

マキの奴、よー言いやがると箸を止め千賀ちゃんにコックリする。

「何だか分らん話はさておいて、私は食べて飲めれば良いだけ楽しみにしています」

ゲンキな千賀めと所長は小声を発した。

「所長、何か言った」

何も言わんよ、空耳じゃないのかと所長は返すのが精一杯。

「千賀ちゃん、私も聞いたからデナーも瀬祭も大丈夫だよ」

一平をしり目にマキが言った。

四人は平らげた、マキちゃん、今日の装いは街並みに溶け籠めると言うかマキバージョンではないねとか、お茶を飲み雑談を始めた。

所長は時計を見ながら時間だ、戻らなければと言い席を立った、後は小生等二人に任せておいて下さい、配送員さんより受領書を預かって下さい、宜しくと所長と千賀子を言い見送った。

「時間までは間がある、井の頭公園でも散策するか」

と一平はマキに声をかけた。

「いいけど池の畔に弁天様が御成になさっています、聞くとところによると、カップルを見るとヤキモチを焼き別れさせてしまう、とか言い伝えます」

「ほー、そんな話があるのか実際別れたカップルはいたのかへ」

「自分の回りでは聞いた事無いけど広くアンケートでもしたらいるかも」

「爺と孫じゃー弁天様も多めに見てくれるだろう」

と一平が言い七井橋を渡り池のふち際を右に進んだ、上り旗が並びその先に赤いお社が見えて来た。

「弁財天様にご挨拶をしていこう、お賽銭持っているだろう」

二人はお賽銭を上げ手を合わせた。水生園を過ぎ先程の七井橋の袂に出る、コーヒーを買い空きベンチを探した、日曜日の午後だ家族連れは勿論、老若男女で溢れている、大胆なカップルもここ、ひょうたん池近くで空きを見つけてやれやれと腰を落ろした。

「その坂を登れば吉祥寺南町に続く、ここならベターやないか時間までちよいと一休みだ」

池にはカルガモ、オナガガモやキンクロハジロが、時折キリリリと体のわりには大声のカイツブリが湖上をスーイスイと、一平とマキは水鳥を眺めコーヒー飲みながらキザ監察官が小荷物受け取り、それ以後を打ち合わせしていた。長沼

所長から電話が入った。

「例の小荷物は午後四時四十分頃、配送されるとセンターから連絡が入った、そのつもりで」

「助かるありがとう、動かぬ証拠固めに大いに役立ちます」

その時が迫って来た、カメラを再確認し二手に分かれた。

「来たぞ」

と、マキが何気ない素振りで見ろを指さしている、宅急便は相谷監察官宅前で停まった、配送員は小荷物を手に取りピポーン、相谷監察官は例のスタイルで玄関に、こつちからは配送員が陰になって角度が悪いが数枚ゲット、辛うじて大きな茶封筒のようなものを確認、マキのベターショットに期待せざるを得ない。

家に入るのを見届け長居は無用とばかりマキに合図を送った。一平とマキは打ち合わせ通り神田川起点下ベンチで落ち合った、一平とは違い満面の笑みのマキ。

「陰になって茶封筒のようなものしか撮れなかった、その様子だとバッチシのようだな」

「これ間違いない、厚さも一寸程でA4サイズの小荷物だよ」

「あの配送員は一旦六時過ぎに吉祥寺センターに戻る、途中で三鷹営業所に寄ってくれる事になっている、営業所に行こう」

営業所前で長沼所長はVサインしながら待っていた、所長はクリアファイルに入った受領書を一平に渡す。

「ありがとう、写真も上手く撮れたしこれで指紋照合と筆跡鑑定が出来る、期待してくれ」

早速三鷹署に鑑定依頼してくる、長沼所長に言い三鷹営業所を残した。

三鷹署村上捜査課長を訪ねこれですとクリアファイルを渡す。

「手筈通りいったようだね、鑑識課に回しておきます、明日にも結果が出ると想います」

父っ様ありがとうお願いします、普段のマキらしからぬ言動で村上捜査課長に言う。

「一平さんの頼みじゃー断れんよ、それにしてもマキ、足手まといせんかった」

「父っ様、何言うの、自分の母上は刑事よ今日もバッチシ」

一平が言う、小生よりはいい角度で写真撮れていました。

「あんまり褒めんといて下さい、その気になつてしまふご指導が良かったんでは」

「そんな事ないよ実力だよ」

すぐその気になるんだからと父っ様。

一平はあいやと言ひ、その続きは家に帰ってからとマキを促し署を出た。

「今日より明日だ今週より来週だ、何事も前向きで日々行こう」

と帰りがけ一平はマキに前置きし話始める。

「明日は一週間の始まりでもあり幼稚園の一週間も始まる、運動会の練習もヒートアップして来る、小生の手伝いもーが本業をお留守にしてはならんぞ」

「分かっています、幼稚園、頑張るから状況は逐一報告する事、自分に出来る事は何なりと指示出す様に幼稚園オフ時は自分を連れて行く事、一平君コックリは」

マキにあつちやー敵わんとばかりに控えめながらコックリ。

翌日昼過ぎ、いつぷくで一平はまりと差し向かいで Pasta と厚切りトーストをバクついていた。調布と府中管内で不審火が三か所あった、その為だろう昼時の常連さんは皆無、深大寺参拝者と思しき二組だけだ、久し振りの二人だけの昼食に笑顔が絶えない、皮肉にもルパン三世が二人の笑顔を消した。

一平さん三鷹署の村上ですと受話器から流れる。

「ありがとう、早いなー結果が出たんですか」

「はねっかえり娘のセリフじゃないがバツチシ、指紋も、送り主の筆跡は白家補佐官に相違なし、送り人住所は大使館のあるビルの上階と記されている、そこは白家補佐官の住居だろう。受け取りサインはジブリ近隣で受け取ったのと同種」

「ありがとう、二人の間で交わされた現金と思われる小荷物授受の動かぬ証拠だ」

「書類と称する小荷物、鑑識課では写真の大きさから見ても一平さんの言うように現ナマ二千万が包まれているのは、鑑識課ならず署でも試してみただ」

「そこお手間を取らせました、ピース大使館から相谷監察官にこんなに多くの書類が届く筈がない、間違いなく現ナマだ、引き続きお手隙の時には情報収集をお願いした」

村上捜査課長は了解と言ひ、一平さん、無理しないようにと付け加え電話を切った。

電話を終えた一平はまりこにコーヒを催促する、二人は再び向き合い仲睦ましくコーヒを嗜んだ。

又もヤルパン三世が、ピース大使館海老原幸子書記官だ。

「一平さんご無沙汰しています、今大使館では国王来日に向け最終確認しています。ランソン大使を始め皆右往左往です、でも私が思うに白家補佐官だけは動きが違う、自分事を熟している様だ、時折誰とかは不明だが一平とかいふくとか言っている様だった、かと思えば難しい顔してシャルム一等書記官とひそひそ話、職員皆は陰日向なく職務遂行しているというのに二人の行動は腑に落ちん事暫しです」

「うー、その二人か、それ以外気付いた事は」

「よく聞き取れなかったが射撃の名手とか拉致とか脅せばとか何とか、国王来日に関係ない事ばかり」

「ありがとう、さっちゃんも気分つけて職務して下さい」

「あつ、言いそびれる所だった为本庁に言えば頼めばとも言っていた、あつ誰か来る又電話します」
でさっちゃんは切った。

「小生もいづくも白家補佐官や相谷監察官等はマークし始めたよーだ、どー出て来るか仕掛けてみよう、いづくもマークされている、気負つけてくれ」

「ここは大丈夫だよ、普段お巡りさんで溢れているから」

「油断は禁物どんな方法で来るか分からん、用心に越した事はない」

「で、仕掛けるってどんな方法で」

「週末に都民の森で鳥観察会がある、マキを連れて行って来る」

「マキちゃんに何かあったらどうするんですか、一平一人で参加してよ」

「一人で行く方がもつと怖い、マキに知れたら一週間や十日じゃーすまない、何故自分を置いて行ったんだと言われればなし間違いない、二人で行った方が平和だ」

好きにしない！、と珍しく口調高めなまりは厨房に戻った。

一平は翌日十時に白金台のレストラン白金で高輪署の大泉警部補と松宮刑事と会っていた。

「相谷監察官は殺人を含め一連の事件をチームいづくのメンバーが嗅ぎ付けたと決めつけた様だ、監察官付けのばあさんがそんな事を言っていた、昨日小生だが私が居るのに話していたと」

奴らは何をしかすか分らん、いづくのメンバーにも危険は迫っている、大さんは公にし事情聴取をと一平に迫った、隣でマキを案ずる松ちゃんも気が気でないように一平を見つめている。

「大さん、何時ぞやも言った通り小生は警察手帳は持っていない、踏み込むにもそれだけの証拠がない、ましてや手帳を持つ大さん等にもお願いしても、目下の所、ずる賢い監察官の事だ、小生もお願いしたいはやまやまだよ、大さん分かってくれ」

ではどうすれば良いんだと大さんは口調を荒げた。

「国王来日まで二週間だ、シャルム一等書記官、白家補佐官や相谷監察官達は本人は動かんしても何らかの動き

が出て来る、それが動かん証拠だ、大使館の動きと田川や室井禎一、ケンとアキと称する人物を見張るんだ、きつと動く」

渋々了解と大さん。

「大使館は正面もさるもの非常階段が曲者だ、目黒のマンションには室井がいる、4LDKだしケンとアキが同居してても狭くはない、そ奴等を張るんだ小生は室井のマンションからあたる」

「よっしゃー、わし等は大使館と田川のヤサだ、一平さん情報は密に交換だぜ」

了解と言ひ三人は散った。

目黒駅で降り太鼓橋目指した、目黒川を渡り下目黒に、目指すマンションは直ぐに見つかった。南側に回り505号室を探した、通常は4と9の部屋番はない五階の右から四番目を確認、晴天だろう洗濯物がここかしこの部屋に。505号室も例外なく洗濯物が、一人にしては貯めていたか異様に多い、複数人分だろうし女性物もある」

そーこー言いながら張り込みを始めた。

午後二時を回った頃洗濯物の取り込みに男が出て来た、室井とは違ういかにもチンピラらしき風体の男だ、無造作に三つの籠に放り込む、終わると窓を閉じカーテンを閉めた。チンピラ風な男はエントラントホールから出て来た、後を追うも駅近くのパチンコ屋に入る。

一平は何気なく店内に入り様子を窺った、パチンコに興じているこの男今日は動かんと察し店外に。夕闇迫る頃室井がスーツケース転がし戻って来た、チンピラが女を連れエントラントホールに消える。

半時後、またもチンピラと思しき男が入った。

「室井にチンピラ二人と女、505号室はその四人暮らしではないか」

と一平、三十分過ぎた頃、女一人出て来るしかも厚化粧だ、夜の出勤と見た。

誰の女かは詮索せんとし全員の動きを見んとな、大さんと情報交換をし明日からだとい平は言い今日の張り込み

を切り上げた。

朝六時、505号室が見渡せる一角に一平はいた、九時を過ぎても起きていないのかカーテンが開かない、十時少し前予約起きたのかカーテンが空いた、ベランダでチンピラ一人と女が夜具のまま手足を伸ばし終わると歯磨きを始めた、オッスと朝の挨拶をするか室井が出て来て一言二言。

「チンピラは二人ではなく一人なのか、505号室はベランダに出ている三人暮らしなのか」

一平はお得意の独り言。

さー誰がいつマンションを出て行き何処で何をするかだ、一平は正面に移動する。小一時間経った頃室井が昨夜と同じ機内持ち込み可能なトランクを引き摺り出て来る。

室井は目黒駅方向に歩き始める、一平は後に続きながら確か目黒と言えば2016年住みたい街（駅）ランキング6位、因みに昨年まで1位だった吉祥寺は2位に甘んじ代わりに恵比寿が1位だとか、そーこーしとつたら目黒駅に着いた。

室井は東急目黒線に乗り多摩川駅で下車、多摩堤通りを上方向に行き多摩川緑地広場着く。日課の一つでもなっているのか五分ほどストレッチしスーツケースを開けた、一平はバードウォッチング宜しく双眼鏡で鳥を追う素振りしながら室井を監視する。

スーツケースの中身はドローンだった、飲食物だろうそれらしき容器も。

室井はドローンの操縦を始めた、さすがは元学生チャンピオンだ宙返りは勿論縦横無尽に飛び回る、木杭を目標に模擬攻撃するが如し、左右上下小刻みな動きをしている。

十五分程でドローンは室井の足元に、一息入れるか折畳椅子を出し保温容器からコーヒーを注ぎ一口二口、電池交換も手際よく行っている、再度離陸し一連の動作を繰り返す。

昼は同居女性を作ったんであろうホットドックを食す、後に昼寝か椅子に腰かけ微動作せず。

一時を回った頃ドロンは離陸した、二時半頃まで飛ばしスーツケースに終い帰路に。

一平は確信した、ドローンに鋭利な刃物でも装備すれば殺傷可能、眼を瞑り一昨年のキスゲ橋での転落死事故を顧みていた。

室井は目黒に戻った、エントラントホールに消えた505号室は留守だったか室井がカーテンを開ける、チンピラ二人と女が入った、小一時間後厚化粧した女が出て来る昨日と同じだ。
大さんと情報交換しいづくに向かった。

いづくでは幼稚園が終わり飛んで来たのかマキが待ち構えている。

「お帰り、今日の収穫は」

とマキが言う。

「帰路キスゲ橋に差し掛かった松下翔平は刃物をつけたドローンの攻撃に遭う、巧みな動神経で交わす、が執拗に迫るドローンに勝てず橋下道路に転落、その場にはドローン操縦者とレディーガガブランドの香水をつけた人と白家補佐官の三人がいた筈」

「一平、殺人じゃー、犯人はその三人で決まりだよ」

「血のりで書かれた文字、半年後に見つかったドローン用の電池と香水瓶、今日、目の当りにしたドローン操縦技術、あくまでも小生の推理にすぎないが」

「白石補佐官の他に後二人、ドローン操縦元大学チャンピオンの室井禎一、射撃の名手寺島加奈で決まりだよね一平」

一平は否定も肯定もせん、コーヒーを飲んでいる、こんばんわとのりが入って来た。
「どうしたの一平さんもマキも難しい顔して」

「おおーこんばんは今日のはのりのステージの日だったか忘れて御免、マキ愛用のミニは走りはするんだがご覧の様に愚図りつばなし、修理費用按分で折り合わんてーとこ」

「一平さんもマキも大人げないね何時もの様に仲良くやんなよ」

「おーそーだな、のりの言う通りにすんか」

「何時も何かと援助して頂いている、今回は自分が出すよ」

そうマキが言うもその後も二人の押し問答が、いい加減にしてよとのりが二人の間に座りコーヒーを。